



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光客のメディア・パフォーマンスによる〈観光地〉の形成：メディア空間と物理空間の相互作用に着目して〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	金, 千
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16534号
Issue Date	2025-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95710
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	JIN_Qian_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：金 千

学位論文題名

観光客のメディア・パフォーマンスによる〈観光地〉の形成 メディア空間と物理空間の相互作用に着目して

本研究は、観光客による〈メディア・パフォーマンス〉に注目し、それによって観光地が形成されるプロセスを明らかにすることを目的とする。観光研究においては、「パフォーマンス的転回」と呼ばれるパラダイムシフト以降、観光客のパフォーマンスが、能動的な身体的関与および行為主体間の相互行為を通じて観光空間の形成に重要な役割を果たすことが一貫して強調されてきた。観光パフォーマンス論は、従来のホスト／ゲスト、生産／消費といった二元論的枠組みを超え、観光客の行動と観光地の形成との関係を捉えるための新たな視座を提供してきた。

しかしながら、従来の議論は主に観光地における現地的なパフォーマンスに焦点を当てており、観光地の外部で行われる観光客の表現的行為が観光地にもたらす影響については、十分に検討されてこなかった。実際、観光客のパフォーマンスは単一の出来事ではなく、連続的なプロセスであり、近年では観光体験をソーシャルメディア上で共有することが一般的となっている。

そこで本研究では、観光客がソーシャルメディア上で観光経験をメディア・コンテンツとして表現する行為を〈メディア・パフォーマンス〉と定義し、それがいかに観光地の形成に関与するのかを考察することで、観光パフォーマンス論の補完的視点を提示することを目指す。

本研究は全9章で構成されている。第1章「序論」では、本研究の背景、目的、方法、そして本研究が持つ新規性について述べた。

第2章および第3章では、既往研究を批判的に検討しながら、本研究の分析枠組みを提示している。第2章では、学際的視点からパフォーマンス論の理論的展開を概観し、とりわけ観光研究における「パフォーマンス的転回」と呼ばれるパラダイムシフトに着目することで、観光地形成のプロセスにおける観光客のパフォーマンスの役割を明らかにした。さらに、観光地を超えた時空間において行われる観光客のポスト・パフォーマンスに焦点を当て、ソーシャルメディアが一般化した現代における観光研究において、メディア・パフォーマンス論の構築が求められていることを指摘した。

第3章では、空間形成とメディアの関係性に注目し、空間認識の変容に関する先行研究を整理するとともに、地理学における物理空間を基盤としたメディア論、メディア研究における空間論の動向を概観した。そのうえで、メディア地理学における空間とメディアの関係性に関する議論を踏まえ、観光研究において空間とメディアの関係性を捉える新たなアプローチを提示した。

第4章および第5章では、オンライン・エスノグラフィーおよび現地調査の結果をもとに、観光客のメディア・パフォーマンスと、それが観光実践に及ぼす影響について考察した。第4章では、代表的なソーシャルメディアであるREDを事例として、ソーシャルメディアの構造をパフォーマンス

スの「舞台」として分析し、観光客によるメディア的表現や他のユーザーとのインタラクションを通じて展開されるメディア・パフォーマンスの仕組みを明らかにした。また、こうしたメディア・パフォーマンスを通じて構築される観光言説の特徴についても示した。

第5章では、メディア空間と物理空間の相互作用に着目し、観光客のメディア・パフォーマンスが観光地における物理的な観光実践に与える影響を考察した。その結果、観光客のメディア・パフォーマンスは、メディア空間において動態的に観光言説を構築するのみならず、物理空間における観光行動や観光地の構造そのものにも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

第6章および第7章では、観光地がメディア空間と物理空間の相互作用によって成立する二つの事例を取り上げ、観光客のメディア・パフォーマンスによる観光地形成のプロセスを、ケーススタディを通じて実証的に検証した。第6章では、コンテンツツーリズムの目的地としての小樽市「天狗山」を事例に、メディア作品のロケ地を訪れる観光客の観光行動およびメディア・パフォーマンスを分析した。その結果、地域文脈と調和したパフォーマンスが、メディア空間と物理空間の相互作用のなかで観光地を形成するプロセスを明らかにした。

第7章では、「SNS 映えスポット」として知られる美瑛町「クリスマスツリーの木」を対象とし、観光客の物理空間およびメディア空間における観光行動と相互行為を分析した。その結果、地域文脈から切り離されたパフォーマンスが、メディア空間と物理空間の相互作用を通じて観光地を形成する仕組みを明らかにした。

第8章では総合考察として、これらのケーススタディの分析結果を総合的に検討し、本研究の目的に立ち返りながら、「メディア・パフォーマンスによる観光空間の生成」と「メディア・パフォーマンスによるオーセンティシティ」という二つの主要論点を中心に議論を展開した。そして、それらを二つの〈観光地〉形成プロセスとして整理・モデル化した。

すなわち、観光客はメディア空間においてメディア・パフォーマンスを行い、ソーシャルメディアという場でのインタラクションを通じて、記号的〈観光地〉を形成する。この記号的〈観光地〉は、観光想像を喚起し、観光実践を誘発すると同時に、多様なパフォーマンスによって再帰的に再構築される。

また、観光客はメディア空間と物理空間を横断する実践を通じて、経験的〈観光地〉を形成する。すなわち、メディア空間で構築された観光想像を物理空間に持ち込み、身体的観光実践を行い、その経験を再びメディア空間へとフィードバックすることで、想像と実践が交錯しながら経験的〈観光地〉が構築される。そしてその過程は、記号的〈観光地〉の再構築にもつながっていく。

メディア空間においては、記号的〈観光地〉を形成する再帰的な〈螺旋構造〉が存在する。一方で、メディア空間と物理空間の相互作用のなかにも、経験的〈観光地〉を形成する再帰的な〈螺旋構造〉が見られる。本研究は、これら二つの螺旋構造のトポロジー的関係のなかで、実存としての観光地が動的に形成されていくプロセスを明らかにした。

第9章では、本研究の結論として各章の議論を統括し、本論文の成果と限界を明示した上で、今後の課題について論じた。本研究は、観光客のメディア・パフォーマンスに着目することにより、観光パフォーマンス論に対して以下の二点において理論的發展をもたらした。第一に、パフォーマンスの空間性の観点から、観光客が観光地の物理空間を離れたメディア空間において行う表現的行動に着目し、〈テレプレゼンス〉という形で〈メディア・パフォーマンスの場〉における他者との相互作用を通じて観光地が形成されるプロセスを明らかにした。第二に、パフォーマンスの時間性の観点から、ポスト・パフォーマンスとしてのメディア・パフォーマンスを単なる静的な成果ではなく、メディア空間において動態的に構築されるものと捉え、観光中のパフォーマンスと連続する一連のプロセスとして位置づけた。

さらに、今後の課題としては、多様なメディア空間において展開されるさまざまなメディア・パフォーマンスの実態をより詳細に考察し、観光研究におけるパフォーマンス論を一層多角的かつ包括的に發展させていく必要性を指摘した。